

## 医学と veritas について

国立国際医療研究センター  
臨床研究連携・バイオバンク部門長  
総長特任補佐，腎臓内科長  
日ノ下 文彦

筆者が医師になって既に四半世紀以上になるが、臨床研究にしろ基礎研究にしろ、これほど医学研究のモラルが問われた時代はなかったように記憶している。さまざまな臨床研究に関する不正や STAP 細胞に関わる一連の問題は、新聞やテレビ等のマスコミにしばしば取り上げられ、これまで医学・生物学研究に関心のなかった一般人にも相当な衝撃を与えた。と同時に、わが国において、iPS 細胞をはじめ再生医療の分野で最先端の研究者達が世界と鎬を削っていることや研究成果をあげるために医学研究者や臨床医、企業が血眼になって臨床研究に取り組んでいることも理解されるようになった。それだけに、我々は「モラルが本当に保たれているのか？研究成果を信じていいのか？」といった世間の疑問に対し真摯に向き合わねばならない。

いったい、データの改ざんや不正処理が行われてしまう原因はどこにあるのか。研究者の競争心、名誉欲、出世欲や研究者を取り巻く周辺の人々、企業などの経済的事情、社会的圧力等いろいろな要因が複雑に絡み合っているのは間違いない。しかし、筆者は自然科学にとって重要な“veritas”を追究する心を忘れてしまったのが最大の要因であるように思う。veritas はラテン語で「真理」を意味し、ハーバード大学のエンブレムにも記されているのは有名である。科学の歴史的進歩は、すべて veritas の追究によってもたらされたと言っても過言ではない。「地球の果ては、どうなっているのか？」という古代から中世に至る疑問は、コペルニクスの地動説によって天動説が覆され、後に地動説が検証されるに至り、解消された。その後、ニュートンによる万有引力の法則の発見やアインシュタインによる相対性理論の発見、山中教授による iPS 細胞の創生に至るまで、

いずれも「真理は何か？」という科学者の純粹無垢な疑問に端を発していると考えられる。

しかしながら、現代の臨床研究や基礎研究が純粹に真理の探究に向かっているかどうかは、それぞれの現場にいる当事者にしかわからない。一部の刑事事件において、確たる物的証拠がなければ真犯人を突き止めるのが難しいように、医学的成果が正しいかどうか第三者には容易に判定できない。しかし、臨床研究のデータ処理も基礎研究における実験やその成果の記述も、第三者から現場が見えないからと言って、無造作に不正を行ってしまうのは、そもそも科学に携わる資格がないと言えるだろう。臨床研究や基礎研究に携わる者はすべて veritas を追究する姿勢を貫き通す正義感と強い精神力が要求される。

では、臨床現場で働く医師やコメディカルは veritas の追究と無縁なのであろうか。その答えは「否」である。時に臨床現場で起こった重篤なインシデントや医療過誤が報道されているが、我々臨床医やコメディカルは、医療上のインシデントが生じないように常に襟を正して診療にあたらねばならないし、インシデントが発生した時には、何故起こったのか、どうして防げなかったのか、公正に真実を追究しなければならぬ。特に、人命に関わる（関わりかねない）インシデントの場合、veritas 追究の精神を忘れず、事実を正確に把握するように努め、決して歪曲したり隠蔽したりすることなく、公平・公正に対応する必要があるだろう。

ともあれ、医学や医療に関わるすべての者は veritas を追究し、人間の健康と福祉、幸福につなげていくという崇高な精神をいついかなる時も忘れずにいたいものである。